

漆研修 (2015年10月2日実施)

JGA 本部研修レポート

朝にかけて吹き荒れた暴風の影響もなく、お天気に恵まれた10月2日(金)の研修当日。会場の広さから、今回はJGA会員のみの募集に対して集まった13名の面々で「目白漆學舎」へ移動。駅前の少し賑やかなエリアを抜けた静かな住宅街を少し入ったところにあり、白い壁に重厚な木の引き戸の外観は好奇心をくすぐる素敵な佇まいだった。

講師は目白漆學舎主催者の室瀬智弥さん。人間国宝・室瀬和美さんを父に持ち、漆文化の担い手



として活躍中であるが、生活様式の洋風化やその伝承の減少から生活空間における使用機会が減る傾向にある漆器の存在に光をあて、漆を中心に誰でもが集え交流し文化を育ててゆくためのこの場所を設立。作家たちが集まり個人の作品を手がけつつ、傷んだ漆器の保存、修復作業にも携わっている。研修では、漆の性質や歴史、私たちと漆の関わりなどについてレクチャーを受け、数種類の異なる工程の見本のお椀で、木地→下地→中

塗り→上塗りと作業を重ねるとどのように仕上がって行くのかを触って体感した。また実際の工房も見学した。

目白漆學舎とは「学び舎」の意味合いも含む。漆に携わる人々が集まり、知恵や知識を共有し互いに高め合い、技術を学び合う場所が必要であるという思いから誕生した。横の繋がりが広がりにくいというこの伝統文化の世界において、工芸作家を目指す若者の拠り所ともなり得る場であり、また同時に自然の循環の中で無理のないサイクルで使い続けられる自然の物質「漆」と人々との新しい気づきや出会い、そして繋がりの場となるようにとの思いが込められている。イベントや教室などでも利用される長机に座り、私たちもまさにこの「出会いの場」で奥深い世界と対面した。参加者間の知識の差はあれど、大変わかりやすく説いて頂き、予備知識がなければいほどその漆の特性への驚きはなんと大きく、今まで漠然と知っているつもりだったことが、まるで他の事だったかのよう。漆そのものの変質により作り出される「漆黒」、日本特有の箱の文化から生まれた蒔絵などが、本当に愛おしく感じられた。



最後に「漆」や「日本の工芸」は単なる'lacquer'や'craft'では表現が足りないというお話。その性質上、他に類を見ない漆は、Japanese lacquer = Urushi であり、工芸は「自然への畏怖、敬意、共生の思想を内包し、装飾文化を内包するもの・日常生活から神に捧げるものまで幅広い意味を持つ」などの意味をぜひ織り交ぜてほしいとのこと。私達が日頃直面する

～辞書には見つけられない言葉～つまり他国ではその概念がない日本特有の事象や文化、を言葉に置き換えながら説明する際に抱く迷いは職人の方々の思いにも相通じるものだったのだと改めて気づかされた。これからはそんな思いにより寄り添ったパフォーマンスを心がけたいと、海外に発信する担い手としての自覚を新たにしたい研修となった。

